

# 聖書の学び／2010年

桑 栄 一

- 1月10日(主の洗礼) 罪のない神の子が、なぜ“罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼”をお受けになったのでしょうか。それは御自身が私たちに代わって、悔い改めの洗礼を受けることによって、全世界の罪を償ういけにえとなるためでした。ですからそれは最後に、十字架の洗礼(ルカ12:50)に至るものであったのです。
- 1月24日(年間第3主日) 洗礼を受けるには信仰が必要ですが、新約聖書はその信仰を、福音を聞くことと固く結びつけて理解しています。私たちはカトリック教会の典礼刷新によって、“ともにささげるミサ”という考え方を学びました。それは新約聖書が教会を、“共に福音を聞く一つの体”であると理解していることと、切り離すことが出来ません。
- 1月31日(年間第4主日) “洗礼を通してその中に入れられ、キリストに結ばれた人々の共同体である教会”(教会憲章14)は、信仰によって成り立っています。私たち信者はもう一度、自分が単にカトリックという組織に所属しているだけなのか、それともイエス・キリストへの信仰を共有しているのかを、真剣に考えて見る必要があります。
- 2月7日(年間第5主日) 私たち信者が、実際にこれまで福音を“受け入れ、また、それに基づいて生活して”来たかどうか、問われているのです。信者は自分の無知と不信仰を、教導職に責任転嫁して、神の御前で言い逃れることなど出来はしません(ヘブ4:12-13参照)。
- 2月14日(年間第6主日) 「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。」この“復活の福音を宣教する教会”が、当時のユダヤ人社会から憎まれ、排斥され、汚名を着せられたということを、聖書は伝えているのです。決して“キリストの福音のため”ではないこの世の社会的な差別や不公平を、聖書は教会の問題としているではありません。
- 2月28日(四旬節第2主日) 四旬節は、洗礼志願者にとっても、またすでに洗礼を受けた信者にとっても、人が教会共同体に加え入れられる唯一の道である洗礼の秘跡について、思いめぐらす期節です。イエスの教えに共感してこれを自分の生活信条とすることと、洗礼によって「新しく創造される」(IIコリ5:17、ガラ6:15)こととは、全く別なことであって、前者は“主義”であり、後者は“信仰”の事柄だからです。
- 3月7日(四旬節第3主日) イエス御自身の、そして原始教会の宣教の核心である“神の国到来の危機”を、多くの現代人は単なる聖書の中の昔話だと思っています。しかしそう考えることによって、実際には聖書が、“現代人には理解困難な書物”になっているのです。“復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き”(使徒信条)、やがて“生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られる”(ニケア・コンスタンチノーブル信条)イエスの叱責の聲が、聞こえるではありませんか。「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。」(マコ12:24)
- 3月14日(四旬節第4主日) 私たちは洗礼の秘跡によって、このキリストの死に結ばれて罪に対して死に、新しい命に生きる者となった(ロマ6:3-11)のですから、「新しく創造された者なのです」(IIコリ5:17)。“私は何年も神様に仕え、カトリックの教えに背いたことは一度もありません”ということではなくて、「大切なのは、新しく創造されること」(ガラ5:15)なのです。
- 3月28日(受難の主日) カトリック教会ではどこでも、四旬節には回心式が行われます。回心が各自の犯した罪の悔い改めを含むのは当然ですが、何よりも忘れてはならない第一のことは、私たちのために死んで復活された神の子イエスに立ち帰ることです(Iペト2:24-25)。私たちはこの期節に再び、「見よ、この

人だ」(ヨハ 19:5/口語訳)と呼ばれているのです。

- 4月4日(復活の主日) 「キリストは…… 御自分の死をもって私たちの死を打ち砕き、復活をもって私たちに命をお与えになった」(復活の叙唱 1)ことを記念するミサの祭儀は、実に「キリストの行為であり……、位階によって秩序づけられている神の民の行為であって」(ミサ典礼書の総則 1)、私たちはこれに参加するために今も心の中で、喜びをもって“走って行く”のです。
- 4月18日(復活節第3主日) 昔から主日やいろいろな祝祭日には、ミサに集う信者たちがいつも特別に着飾って来るキリスト教の慣習の起源を、私たちはヨハ 21:7に見出します。それは世間的な意味での儀礼や、あるいは自分たちが楽しむためのものとは違う、“宗教的行為”と考えるべきでしょう。ミサは、私たちが“主にお会いする”特別な時であり、その意味で“キリスト者の生活全体の中心”(ミサ典礼書の総則 1)であるからです。
- 4月25日(復活節第4主日) 今年の2月に「カトリック教会のカテキズム要約」が日本語に翻訳されて出版され、これを用いての勉強会が諸教会で始まっていることは、大変喜ばしい現象です。これを一つの突破口にして、信徒が聖書と聖伝への関心と理解を深めるようになってほしいものです。カテキズムは、あくまでも聖書と聖伝の解説書であって、どれほどよく出来ていても、決してそれに取って代わるものではないからです。聖書の代用品、聖伝の代替品がないように、キリストの言葉の代用品や代替品は決して存在しません。カテキズムの編纂者である教導職は、「神の言葉の上にある者ではなく、むしろこれに奉仕し、伝えられたことだけを教えるのである。」(神の啓示に関する教義憲章 10) このことをわきまえて学ぶことにより、多くのカトリックの子らが「主の言葉を賛美」(使 13:48)する者になって、栄光が神にささげられますように。
- 5月9日(復活節第6主日) 典礼憲章(8)が述べているように、「地上の典礼において、われわれは天上の典礼を前もって味わい、これに参加している」のですから、この都を待望する信仰(ヘブ 11:10,16)を、一人一人の信者がしっかりと受け継ぐことを学ばなければなりません。「昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」(ヘブ 11:2) そうであれば、現代のキリスト者の場合は尚更ではありませんか。
- 5月23日(聖霊降臨の主日) 「わたしの言葉」(ヨハ 14:23)とは、神がキリストによって世を御自分と和解させてくださった福音、すなわち教会が宣教している“出来事としての言葉(λόγος)”のことだと、私たちは先日学びました。このキリストの福音を共有するための教会共同体の一致と団結こそが、ヨハ 14:15の「わたしの掟」の意味であることを理解しましょう。この「わたしの言葉」と切り離して、それとは独立して聖霊の働きを理解するなどということは、使徒たちにとっても、原始教会にとっても、無縁なことでありました。
- 6月6日(キリストの聖体) 浜松教会の主日のミサでは、ほとんどいつも第二奉獻文だけが使われていることに、信者はすっかり慣れ切ってしまうように見受けられます。これはその特徴から、週日または特殊な事情において用いるのが適当であると述べられ(総則 322)、ユンクマンも“共同体全体の典礼のためよりも、もっとあっさりした形……”と説明しているものです。総則が第三奉獻文を、「主日と祝日には優先的に用いられる」と述べている理由は、ユンクマンによる“これはローマ典礼の伝統と、再発見された奉獻文の理想像を、非常に良くまとめたものである”という説明で明らかです。
- 6月20日(年間第12主日) 感謝の典礼で、以前には聖体拝領と呼ばれていたものが、現在では“交わりの儀”となっています。これは外でもなく、神の国の完成における天の典礼を先取りする保証であり、証しです(典礼憲章 8)。この場面で、やがて御国を受け継ぐことを保証された“一つの共同体”が、目に見えるもの、人間的に体験出来るものとして姿を現します。そのように理解することを訓練されていない信徒、また指導することを知らない司祭は、不幸です。
- 7月4日(年間第14主日) 私たち信者が“キリストを誇る”と言うとき、それは“私はキリストと共に死に、今はキリストと共に生きている”ということですから(ガラ 2:19-20、ロマ 6:3-11、コロ 2:12)。決して自分の善

行や知識を誇ることはありません(ロマ3:27、Iコリ1:29)。そしてそうであれば当然、私もキリストの十字架の福音を宣べ伝えて歩いて来たということ、誇る事が出来ます(ロマ15:17-19、IIコリ10:12-18)。私たち信者は、この点でいささかも聖職位階にある人々よりも、自分は責任が軽いなどと思ってはなりません。それで教会憲章30は、「神の民について言われたすべてのことは、信徒、修道者、聖職者に平等に向けられている」と述べているのです。

7月11日(年間第15主日) カトリック教会は、“使徒たちから伝えられたこと(聖伝と聖書)”を、今日に至るまで大切に生きて来ました。そのことは、“第二バチカン公会議の公文書集”でも、“カトリック教会のカテキズム”でも、非常に明確にされ、強調されていることです。ですから、信者一人一人が聖書に親しんで、「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にある」ということが、当然であるように成長することが、切に勧められているのです。この勧めは、決して「難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。」(申30:11) 特別な訓練や、特別な資格を必要とするものではないから、誰か偉い先生に講義してもらわなければ理解出来ないなどということはありません。あなたが毎日、新聞や雑誌や小説を読むように、それは手軽に読むことが出来るのです。恐らく普通の日本人の読書力なら、新約聖書を読むのに何ヶ月もかかりはしないし、旧約聖書だって一年もかかることはありません。

8月1日(年間第18主日) ルカ12:15「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」最も危険な誤解は、キリスト教の信仰と救いは地上的なものではなくて、精神の世界の事柄だという解釈です。具体的な実生活と心の中の信仰とを切り離す人は、“聖書も神の力も知らない人”(マタ22:29)だと言わなければなりません。人はだれでもその人生の旅路で、金持ちにも貧乏にもなる可能性を持っているように、同時に、しかもそれとは無関係に、神の前に豊かになったりならなかったりする(ルカ12:21)可能性を与えられているのです。問題は、「あなたの富のあるところに、あなたの心もある」(マタ6:21)ということです。あなたの人生にとって、イエス・キリストの福音とその救いは、如何ほどのものですか。それが今、問われているのです。

8月15日(聖母の被昇天) 私たちはマリアの祭日を祝うたびに、マリアを“神の母(θεοτόκος)”と呼んで敬い、祝います。そのとき忘れてはならないことは、いかにマリアを崇敬しても、キリストを救い主なる神と信じなければ、この呼称は成り立たないということです(教会憲章60,62参照)。カトリック教会は、聖書の時代よりも後になって顕著になって来た“聖母マリアへの崇敬”が、冷静に考えれば“少しも不思議ではない、……正当である”(教会憲章56)ことと、この崇敬が教父たちの時代以降“教会の中に常に存在した”(教会憲章66)という事実を承認し、これに賛同しているのです。

9月5日(年間第23主日) 私たち信者はどのようにしてキリストの福音を学ぶのでしょうか。……司教とこれに従属する司祭は、キリストの福音を「真理の霊の導きの下に、説教によってそれを忠実に保ち、説明し、普及する」(神の啓示に関する教義憲章9)のです。この説教の役割については、プロテスタント教会も全く同様に理解しています。しかし現実には、残念なことにほとんどの信者は、カトリックでもプロテスタントでも、“使徒たちから伝えられた福音”を説教で聞かされていない……つまり説教が本来の意味での説教になっていないということを指摘せざるを得ません。

10月3日(年間第27主日) 全世界の各教区の司教は、直接にはなくローマの使徒座との交わりを通して、この使徒継承に与るのだと説明されています(ラッツィンガー枢機卿1961年の論文)。……私たち信徒にとって問題は、私たちの司教区の司教と、司教に属する個々の司祭が、教会に委ねられている使徒的福音を本当に正しく守りかつ教えているだろうかという、地方教会の実態に関することです。批判するためではなく、教会を造り上げるために(エフェ4:12)、司教と司祭だけではなく、聖霊は信徒一人一人にも務め(奉仕)を分け与えてくださっているのです(IIコリ12:4-11)。

10月10日(年間第28主日) 古くからのAve Maria(天使祝詞)が“聖母マリアへの祈り”として改訳されたことに対する異論を、一部の古い信者たちがかなり強く訴えているようです。元来のラテン語歌詞のルカ

1:42による部分が改変された点が問題の出発点のように察せられます。……しかし救いはマリアからではなく、神から来るという当然の事実が、誤解によって見失われないための配慮により(教会憲章 60-62)、さらに言えば「あらゆる偽りの誇張を避ける」(同 67)のために、このような改訳が敢えて行われたと考えるのは、行き過ぎでしょうか。これを元来の Ave Maria の改変としてではなくて、むしろ本来の意図の現代人への明確化として受容するのがよいように思われるのですが……。

11月14日(年間第33主日) “おもに話す者”(使 14:12)が司祭や修道者であっても、福音の宣教はそれを取り囲む信徒たちによって支えられているのでなければ、“少しも働かず、余計なことをしている”(v.11)という使徒の叱責が当てはまるのではないのでしょうか。まして信徒たちの中に“神の言葉が現に働いている”のでなければ、そのような教会から“本当に正しくキリストの福音を語る”司祭や修道者が生まれる筈もないということを、真面目に考えるべきでしょう。

11月21日(王であるキリスト) 1925年、当時の教皇ピオ十一世は、10月最終主日を“王であるキリストの祭日”と決めました。その後この祭日は典礼暦の最終主日に移されましたが、その背景にある重大な神学的な意義については、ほとんど信徒向けには語られて来なかったように見受けられます。第一次世界大戦後にヨーロッパで起こった神学闘争とその結果である“バルメン宣言”(1934年)が一方にあり、他方には時を同じくしてロシアからの避難民の神学者を通して入って来た、原始教会の終末論を失わずに保っている東方教会の思想の大きな流れがありました。そして再び、聖書はそれ自身の前提の上に立って読まなければならないということが、次第に理解されて来たことが、恐らくカトリック教会におけるこの祭日制定の背景であろうと考えられます。

12月12日(待降節第3主日) 私たちキリスト者は、自分の信仰が“神の約束への信仰”、“約束を実現してくださるイエス・キリストへの信仰”以外ではあり得ないことを、今年もこの期節に再確認しましょう。私たちの教会の信仰、教会が公に言い表している希望(ヘブ 10:23)とは、「罪の赦しをもたらす唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます」だからです(ニケア・コンスタンチノーブル信条)。

12月26日(聖家族) 今朝私たちが祝っている聖家族は、ただ一つのこと、「主が預言者を通して言われていたことが実現するため」(マタ 2:15)に歩みました。今日の祝日のミサをささげる現代の教会が、そして信者一人一人が、この“聖家族の模範にならい、生活の苦勞を乗り越えて、ともに永遠の喜びに入ることができますように。”(今朝の拝領祈願)